



# 共 育

弥生3月、木々草花が芽吹き、命の営みがいよいよ活発になる季節です。

学校では、間近に迫った卒業式に向け、練習を重ねているところです。卒業式は学校行事の中で最も緊張する儀式の日です。全校で思い出に残る卒業式を創り上げるため、頑張っています。本号では、以前に自分が出会ったある出来事について掲載します。

以前、勤務していたある中学校での話です。

年度が押し迫り、図書室の担当をしていた私は、貸出期間の過ぎた本の返却を全校に呼びかけていました。ある日、一本の電話がかかりました。それは地域に住んでいらっしゃる一人の女性からでした。「図書の先生にお話が…」ということで私が伺うと、「自分はこの学校の卒業生の母です。もう何年も前に、うちの子が借りた本が出てきました。お返しに行きたいのですが。」ということでした。「いつでもいいです。お持ちください。」とお応えしました。数日後、電話の女性が一冊の本を持って学校に来られました。本はお菓子づくりの本で、お菓子の作り方だけのレシピ本ではなく、一つ一つのお菓子にまつわる筆者のエピソードや、お菓子の歴史などが一緒に添えられた本だったと思います。その女性は、本を返しながら雑談のように、この本を借りた当時のお話をしてくださいました。

娘さんは当時、友だち関係に悩み、教室に入ることができず、学校にきても図書室で過ごされていたそうです。そんな折にこの本を借りて家に持って帰られたらしいのです。その先のいきさつまでは私には分かりませんが、お母さんは本を返しながらか、この本に救われました。娘は今、パティシエ目指して専門学校に通っています。」とにっこりされながら話してくださいました。

お母さんも娘さんも、当時のことを笑顔で話せるようになるまでには、どんなにか時間がかかっただろう、私などには想像もできないことですが、こうして、貸出期間がずいぶん過ぎ、もどってきた本はもう色あせていました。今のようにバーコードで管理する時代の本ではありませんでしたが、そのお母さんにとっては、大切な大切な本だったのでしょう。わざわざ返しにきてくださったお母さんの思いを受け止め、そっと本棚に返したことができました。



## ～「<sup>そったく</sup>啐啄の機」～

「ひな鳥が卵の殻を中からつつき、それに呼応して親鳥が外から殻にひびを入れる時」の意味です。卒業を迎えた子どもたちの「よく考え、進んで行動し、素直に表現する」姿に、まさに生まれ出るひな鳥の力強い合図を実感しています。

中学校では楽しいことや苦しいことも多いと思いますが、瑞穂で培った心と体で、新しい羽咋中学校の伝統を築く一翼を担ってほしいと願っています。